

演題名：牛の肝臓および腎臓に見られた嚢胞性病変

発表者氏名：金谷 安利

発表者所属：滋賀県食肉衛生検査所

1. はじめに：臓器の嚢胞性病変は、先天性および後天性の様々な原因により生じる。牛のと畜検査において、腎臓に嚢胞を認めることは多いが、肝臓に嚢胞を認めることはあまり多くない。今回、肝臓と腎臓の両方に多発性の嚢胞性病変を認め病理学的検索を行ったので、その概要を報告する。

2. 材料および方法：

(1) 材料：当該牛は、黒毛和種、雌、269 か月齢で健康畜として搬入された。解体後検査において、肝臓、腎臓に多発性嚢胞性病変を認め、その他には著変を認めなかった。

(2) 方法：肝臓、腎臓について、病理組織学的検査を実施した。定法により、10%ホルマリン溶液で固定後、病理組織標本作製し、ヘマトキシリン・エオジン(HE)染色を実施した。

3. 成績：

(1) 肉眼所見：

ア. 肝臓：肝門部から左葉を中心に、径 2cm～15cm の大きさで、臓側面から横隔面両側におよぶ多発性の嚢胞性病変を認め、黒褐色でやや粘稠な液体を内包していた。

イ. 腎臓：左右両腎において、散在性、多発性に径 1mm～5cm の大きさの嚢胞性病変を認め、やや黄色、透明、漿液性の液体を内包していた。

(2) 組織所見：

ア. 肝臓：嚢胞は、単層の扁平状または立方状の上皮で裏打ちされ、その周囲を結合組織が覆っていた。結合組織の中には胆管が多く見られ、一部の胆管の周囲では、リンパ球の集簇を認めた。

イ. 腎臓：嚢胞は、単層の扁平状または立方状の上皮で裏打ちされ、一部の嚢胞ではその周囲を結合組織が覆っていた。皮質の間質には、炎症細胞の浸潤と結合組織の増生が認められた。

(3) 診断名

ア. 肝臓：胆管炎に伴う胆管周囲嚢胞

イ. 腎臓：間質の炎症に伴う嚢胞腎

4. 結論：

肝胆道系と腎臓尿細管に発生する先天性嚢胞性病変がヒト、犬、猫、豚、山羊、馬で知られている。ヒトの遺伝性多発性嚢胞腎のひとつである常染色体優性嚢胞腎 (ADPKD) は、立方ないし円柱上皮に裏打ちされた嚢胞を形成し、嚢胞間にある正常の腎実質組織が加齢に伴う病態の進行とともに萎縮、線維化する疾病で、1 / 3 の患者で胆管上皮に似た細胞で裏打ちされた肝嚢胞を合併する。本症例の組織学的所見は、この疾病に似るが、牛における遺伝性要因の関連は明らかになっていない。一方、胆管周囲嚢胞は、胆管周囲付属腺が何らかの理由で閉塞することにより、肝嚢胞を生じる疾病であり、本症例の肝臓の病理学的検索においても、胆管炎を認めたことなどから、胆管周囲嚢胞であると考えた。腎臓においても間質に線維化を認め、後天的な要因で嚢胞腎を生じたと考えた。本症例は、269 か月齢と高齢であったことから、慢性疾患や老齢性変化に伴う後天性要因により生じた嚢胞性病変であると思われる。